

に於て發達したものがある。ここに於ては上記の障害が起らぬ様に子房が適當に捻轉している。しかし單一花を有するシュンランに於ても實はその捻轉が全く起らぬかと言うに、さうでなく、普通 45° 位は左又は右に捻れている場合が多い。この場合いかなる場合に左に或は右に捻れるかの問題が残るが、これは他の場合にゆずる。捻轉するラン科植物の凡ての場合、蕾の時にはそれが起つて居らず、満開時に到つて初めてそれが完成するのであるが、シュスラン屬 (*Zeuxine*) 等では果實となるに従つてそれが、再び捻れ戻つて花本來の正常位置に來る。これは果實の裂開を促進する効果があるように想像される。追記：久内清孝氏から伺つた所によると1花序軸の上に互にかなり隔つて3個の花が發達したシュンランの1例を見たことがある由である。

○植物のおしば標本を半日で作る方法 (前川文夫) (Fumio MAEKAWA:
A method of preparing dried specimens in half a day.)

ササ、ハギ、モミジなどの普通の厚さの葉のものであるならば、そして夏の頃夜間でも気温 20 度を下らぬ頃ならば、午前中に採集したものを午後の半日の手数だけでできる標本にすることが出来る。準備としては厚手の吸収紙もちろん結構だがそれがなくても平氣である。代用として新聞紙(この頃の表裏2頁のものを4枚分重ねて2つに折る。つまり8枚に折りたゝんでホツチキスでとじると具合がよい)をつかつて吸収用紙をつくる。これを日光にあてて熱く焼けたのを使う。日に焼けて狐色になつても、私の経験では十數年使つてちつともさしつかえがない。植物を挟むのは別に1頁大の新聞紙を使う。この兩者をかわり番に重ねるのだが、その時に折りたゝみの折目を吸収用紙のは左、植物をはさんだ新聞紙のそれは右という風にしておくとな率がよい。

この筆法で標本を作るのであるが1例をあげると、

某日(晴)午後3時ごろから時々曇る。

2.00 時 日光に乾かしてあつた吸収用紙を使用して採集して來た植物を間に入れた新聞紙をはさみ、金網の野冊にはさむ。それをアイゼンバンドのバンドを利用してかなり強くしめる。金網がなければ板ではさんで重しをのせてもよい。このときは2頁目位の重さがよい。

3.00 時 第一回吸収用紙のとりかえ、吸収用紙は水を含んでべたべたである。とりかへ用の吸収用紙は別に前と同じく日光にあてて焼けてあつくなつていゝのを使う。植物をはさんだ新聞紙はそのまゝで決してとりかえない。注意して開いて中の植物の姿勢を直すのはよいが、この紙をとりかへることは時間と勞力とを無駄にし、その上、標本の形を崩すだけで大した効果がない。

3.40 時 第二回のとりかへ、準備と注意とは前に同じ。

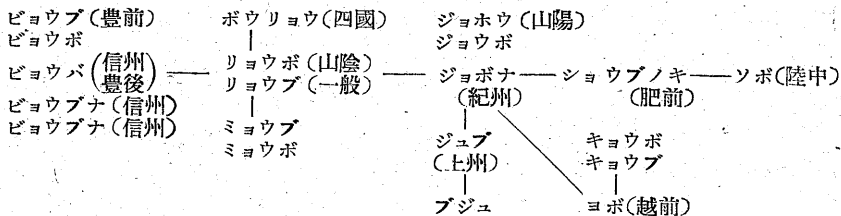
このまゝ翌日の朝まで置いて、朝開いてみると吸収用紙にはまだ暖か味が残つて多少の濕氣はあるが、植物をはさんだ新聞紙と中の植物とは乾いている。葉色や花の色は冴

えた色をしていてこれで出来上つたのである。念を入れるならこゝで今一度日にやけた熱いのには 2 時間もはさんでおくなら申分はない。

○リョウブの語源はソバノキか? (前川文夫) (Fumio MAEKAWA: Etymological consideration on the Japanese name of *Clethra barbinervis*.)

リョウブには系統の違う名が少くとも三つある。ハタツモリ、サルナメシ、リョウブの三つである。第一は牧野先生が「旗積り」であることを確められた。これは花の形容に基ずいている。第二は「猿滑し」でサルダメシとも轉訛しているが、これは樹幹の形容から来ている。この木の皮は少し太くなると丁度サルスベリ(百合紅)の様に剥げて来て、あとは黄褐色を帯びた膚が滑らかで猿がすべるといふ表現がふさはしい。⁸ 恐らく上等の薪炭を焼き又くり物を引く材として注目したもので、冬木立の時の利用が注目動機であろう。ヒメジャラにもサルスベリ、サルナメリの方言があるのと同巧異曲である。この兩名稱ともに少くとも言葉の上では全く別の概念たとへばハタなりサルなりを借用してその行動を示す言葉とを前後結びつけて木の名としたものであつて、共に古い名ではあるが最も古形の命名法ではなく、かなり自由な餘裕のある命名態度がとれる様になつた時代——多分平安前期の前後であろう——の産物であろうと思われる。

残る一つのリョウブについては、この名が今は表だつた學問的な名に採用されてはいるが、語源がわからないといわれている。この頃牧野先生の牧野植物隨筆: 27—28 を読み、又農商務省山林局發行の日本樹木名方言集: 290 を繰りてみて一つの手掛りかと思ふものをえたのである。それはリョウブに連絡を有するかと思はれる方言が幾通りもあつて中々變化に富んでいることであつた。試みにそれらを類似の程度で並べてみたが下の如くになつた。



明らかに二つの音節から成立つていて語根は B 列である。ところどころにナの子があるのは若芽を食用にするためについた名であるからこれは別問題である。語幹の方は Byô-Ryô(Myô)-Jô(Yô)-Syô(Kyô)-So となつている。この音韻變化はかなり廣い範圍であると共に變化が甚だしいが同一物を指している點と語根が共通である點とで、一つの系列上の變化として受取つてよいと考える。ところで注意を要することはこれだけではこの變化の向きが別に決らない。左向きとも右向きともいずれともとれるのであるが、右端の二段が陸中と肥前との方言であるところに意味がありそうなのである。言葉が中